音の世界

岸田國士

青空文庫

女
男甲
男乙
其の他

舞台は、連絡なき三つの場所を同時に示し得るやう、その空間を利用して、それぞれ独立した装置を施す。三つの情景は、大体次の如き関係に配置されてゐればよい。

Aは、ホテルのアパルトマンに属する贅沢なサロン。

Bは、別のホテルの一人用寝台附小室。

Cは、ある商店の電話室。

時刻は午後九時。

Aの部屋では、男甲がソファに倚つて夕刊を読んでゐる。その妻らしき女が、隣室から出て来る。

女　ちよつと、大きい方のトランクを開けて頂戴な。

男甲　もう寝るんだから、明日にしたらどうだ。

女　今、いるもんがあるのよ。

男甲　なにがいるんだ。

女　いゝから開けて頂戴つたら……。

男甲、渋々起つて隣室にはひる。女、その後に続く。この時、Bの部屋へ、男乙が、外から帰つて来る。帽子を被つたまゝ寝台の上に寝ころがる。が、すぐにまた起き上り、電話の受話器を外す。

男乙　もし、もし、都ホテルへ繋いでくれ給へ。あゝ、都ホテル……。もし、もし、そちら、都ホテルですか。楠見つていふ人ゐますね。えゝ、さうです、夫婦連れの……。今、ゐますね。僕の名前は云はなくつてもよろしい。すぐ繋いで下さい……。

Aの部屋の電話が鳴る。女が電話口に現れる。

女　もし、もし……えゝ、さうです。はい、どうぞ……。

男乙　ありがたう。あ、もし、もし……。

女　どなた様でいらつしやいますか。

男乙　今晩は……。僕だよ。

女　あゝ、さう……（ちよつと隣室の方に眼をやり）今、何処から……？

男乙　ステーション・ホテルだ。さつきは失敬……。悪いと思つて黙つてたんだよ。そこにゐるの、大将……。

女　えゝ、ゐるわ。

男乙　僕の声聞えやしない？

女　さうね、あぶないわ。あなたも、旦那様と御一緒なの。まあ、ちつとも知らなかつたわ。お遊びにいらつしやいな。

男乙　どうだい、結果は……。あんまり新婚旅行らしくないぜ。

女　どうして……。

男甲、隣室より現れ、再びソファに腰をおろす。夕刊を読み続ける。時々、上眼使ひに女の方を見る。

男乙　全く偶然なんだよ、今日、こんなところで、落ち合ふなんて……。僕、いよいよ出掛けることになつてね、明日の午後、神戸を発つんだよ。その前に、京都の友達に会つとかうと思つて、やつて来たのさ。

女　あたしたちが此処に泊つてること、よくおわかりになつたわね。

男乙　大概、見当がつくさ。電話なんかかけて悪かつたか知ら？

女　あんまりよくもないけど……。でも、うれしいわ。まだ赤

ちやんはおできにならない？　え？　お嬢ちやんお一人……。ぢや、旦那様そつくりでせう。

男乙　やつぱり顔を見ると駄目だね。ちよつとでもいゝから声が聞きたくなるんだ。

女　あたしもよ、それは……。あのまゝだつたら、あたし……。さうよ、学校を出てから、ずつとですもの。だけど、ぢや、いよいよ、行つておしまひになるのね。

男乙　さうするより、しようがないもの。無論、僕たちの取つた道は、今でも正しいと思つてるよ。君が結婚の相手にさういふ人を選んだことは、第一賢明でもあるし、僕がまた、それを許したことは、自分自身を知るものだと、少しは自惚れてるくらゐなんだ。——話中……えゝ、どうぞ——だからさ、今、かうやつて、君と話しをしてゐても、君の現在に対して、露ほども不快な感情はもつてやしないし、これから外国へ行くことなんか、それほど悲壮に考へなくたつていゝんだよ。たゞね……。

女　それでなくつちや嘘だわ。あなたらしくないわ。旦那様がそんな風なら、あなたもしつかりなさらなくつちや……。でも、めいめいが自由だつていふことは、却つていゝぢやないの。あたしんとこなんか、どちらかつて云へば、縛られすぎてるくらゐだわ。

男乙　なんだい、その話は……。もう少しこつちに関係のある話をしてもらひたいなあ。今、君んとこの大将、何してるの。

女　うちの大将、今、新聞を読んでるわ。時々、あたしの方を、こはい眼で見てるわ。

男乙　ぢや、これくらゐで止さう。もう寝るんだらう。

女　まあ、そんなとこね。

男乙　ゆつくりおやすみ。

女　御機嫌よう。

女、受話器をかけ、そのまゝ、男甲の方に近づき、その後ろから無意味に新聞をのぞき込む。男乙は、しばらく受話器を耳に当てゝゐるが、思ひ切つて、その場を離れる。服を脱いでピジヤマと着替へる。

女　三年前に結婚した学校のお友達なのよ。今日、丸山公園であたしたちを見かけたんですつて……。あんなひと、すつかり忘れてたわ。

男甲　なんていふ人だい。

女　え？　あのね……。お嫁に行つた先は、なんとか云つたつけ……。友石だつたか知ら、……なんでもそんな名前よ。画家だわ。

男甲　風呂はどうする？

女　もつとあとからにするわ。

男甲　そんなこと云つて何時(いつ)まで起きてるつもりだい。

女　眠くなるまで……。

女、男甲の傍を離れ、隣室にはひる。Bの部屋で、男乙は寝台にはひらうとし、思ひ出したやうに、電話器に近づく。受話器に手をかけようとするが、思ひ直して、鞄から書物を一冊取り出し、寝台に寝そべつて、頁を繰り

はじめる。しかし、それも、一分間とは続かない。すぐに起き上り、飛びつくやうに受話器を外す。

男乙　もし、もし、もう一度、都ホテル……。さうです。……都ホテルですか。済みませんが、もう一度、楠見君の部屋へ繋いで下さい。えゝ、呼び出して下さればわかります。

Aの部屋の電話が鳴る。女が慌てゝ、隣室から姿を現すのと、男甲が、急いで受話器を耳に当てるのと、殆んど同時である。

男甲　はい、はい。

男乙　もし、もし……はい……。

長い沈黙。二人の男は、先に相手の声を聴き分けようとして互に、耳を澄してゐるのである。

男甲　もし、もし、わたし、楠見です。どなたですか。

男乙　……（受話器を耳より放し、途方に暮れる）

男甲　もし、もし、わたしに御用ですか、家内に御用ですか。

女、恐る恐る電話に近づく。

女　どら、あたしに貸して御覧なさい。この電話、よく聞えないのよ。（受話器を男甲より受取り）もし、もし、こちら、楠見でございますが……。もし、もし……。

この時、男乙、再び受話器を耳に当てる。男甲、元の席に帰り、また新聞を読む。

女　どうしたんだらう、ちつとも聞えないわ。間違ひか知ら……もし、もし、もし、もし……。

男乙　あゝ、やつと通じた。僕だよ……。大丈夫かい。もう一度だけね、これでおしまひだ。大将、なんにも気がついてやしまいね。

女　あ、さやうでいらつしやいますか。さあ、如何でございますか……。

男乙　話してもいゝね。もう、寝てたの？

女　どういたしまして……。

男乙　迷惑だつたら、かまはないよ。そつちから切つてくれ給へ。

女　まあ、迷惑だなんて、そんな御心配は、決して……でも……。

男乙　うん、それや無論、わかつてるよ。だから、こんなに急いでるんぢやないか。出来ることなら、一口で、なにもかも云つてしまひたいくらゐだ。僕は、君にとつて、邪魔な人間でありたくないんだ。どういふ意味でゝも、なるだけ遠くに離れてゐようと思ふんだ。しかし、僕たちの別れ方は、あんまり理想的すぎた。あんまり、美しい余韻がありすぎたんだ。眠つてゐる僕の腕から、そうつと抜け出して行つた君を、僕はまだ、夢の中で抱いてゐるんだ。可笑しい、こんな云ひ方をするのは……だが、ほんとに、

さうなんだ。

女　それはもう、お察しいたしますわ。でも先程、奥様からお電話をいたゞきました時は、そんなお話は、ちつともなさいませんでしたけれど……。

男乙　我慢してたのさ。云つてもしようがないと思つたからさ。でも、僕は、難題を持ち出さうつていふんぢやないよ。それは安心し給ひ。君に是非、云つて置きたい、いや、寧ろ、知らして置きたいことつていふのは、つまり……。

男甲　なんの話だい……いつまでも……。

女　ちよつと、お待ちになつて……。お話がよくわかり兼ねますが、つまり、奥さまが、こちらへお見えになる筈なんでございますね。で、おいでになりましたら、どういたしませばよろしいんでございますか。あたくし一存では計らひ兼ねますけれど、主人とも何れ相談いたしまして……。はい、それはもう、よく心得てをります。

男乙　それでだね、今の話ね、僕はいろいろ考へた末、どうせ外国なんかへ行つたつて、僕の頭から君が去ることはないんだし、君の方でも、僕が何処かに生きてゐるつていふことは、なんとなく、気持を楽にさせないだらうし……。

女　え？　なにをでございますの？

男乙　気持をだよ、気持を楽にさせないだらうつていふのさ。

女　それで……？

男乙　それでね、僕は、決心したんだよ。

男乙は、かう云ひながら、右手を伸ばし、椅子の上に脱ぎ捨てたズボンのカクシから、拳銃を取り出し、それを弄びはじめる。

女　御決心つて、それは、あたくし、想像がつき兼ねますが。

男乙　今、僕の手に握つてゐるものを見たら、すぐわかることなんだ。少し大きな音がするから、驚いちやいけないよ。

女　そんな、御冗談みたいなこと、おつしやるもんぢやございません。なんの必要があつてそんなことをなさるんですの。いゝえ、なんの必要があつて、あたくしの眼の前でそんなことをなさるんです？　あなたは、卑怯な方ですわ。

男甲　おい、どうしたんだ。

男乙　さういふ風に取られちや困るよ。僕は、たゞ、自分だけの決心を、一番便利な、しかも、一番僕たちの好みに適つた方法で、君の耳に入れて置かうと云ふだけなんだ。勿論、結果だけなら、何時か、知れるにきまつてるさ。それぢや面白くないからね。しかし、断つとくが、君はどんな場合でも、平静を装つてゐなければやいけないよ。無論駈けつけて来るには及ばない。僕たちの歴史は、この瞬間、最後の頁を閉ぢたのだから、君は、君の旦那さんのそばへ、笑つて帰り給へ。

男乙は、かう云ひ終つて、拳銃を空に向つて放つ。

女　（その瞬間、受話器を耳より離し、無意識に、片手で眼を押へる）

男甲　なにをしてるんだ。え、おい。今のはなんの音だ。

女　（静かに受話器をかけ、男甲のそばに近づき）大抵、わかつたでせう、どんなこつたか……。

男甲　おしまひのところが、よくわからん。

女　（拳銃で喉を撃つ手真似をして）たうとう、やつたのよ。

男甲　馬鹿な……。

女　ほんとよ。（椅子に腰をおろす）

Bの部屋では、男乙が、拳銃をテーブルの上に投げ出したまゝ、煙草を喫ひはじめる。

マネージヤーらしき男が、扉を開けてはひつて来る。数人のボーイが、後から続く。

男乙　なんでもないんだよ。電話で空砲の音を聞かしてやつたんだ。話の弾みでね。お騒せして済まなかつた。あ、それからね。もう少し経つて、若い女が訪ねて来るかも知れないが、僕の家内つていふことにして、こつちへ通してくれ給ひ。

一同、顔を見合はして出で去つた後、男乙は、寝台に寝転つて書物を読みはじめる。

Aの部屋では、男甲が、先づ、新聞を畳み、起ち上る。

男甲　京都では、まだお前に見せるものがあつたつけな。

女　なあに？

男甲　舞妓さ。

女　そんなもんどうだつていゝわ。

男甲　まあ、後学のために見ておけ。まだ睡くなけれや、今から出かけるか。こうつと……。何処がいゝかな。どれ、ひとつ、ナンバア・ワンつていふところをお目にかけよう。（電話の方に近づく。受話器を取り上げ）もしもし京極一六二九番……。

Cの電話室の呼鈴が鳴る。丁稚風の少年が現れる。

少年　あ、もし、もし……。

男甲　あ、もし、もし……。わしだよ。東京の楠見だよ。

少年　楠見はん、そんな人、知れへん。

男甲　君は、誰……。

少年　わてか。わて、米吉いふもんどす。

男甲　あゝ、米竜か。わしだよ。はゝゝゝ、わかつたか。うん、しばらく……。どうだね、その後は……。いや、なに大したこともないさ。実は今度は、家内を連れて、見物かたがたやつて来たんだがね。どうも見物も疲れるばかりでね。はゝゝゝ、さうはいかんさ。そいつは、一人で来た時にしよう。うん、さういふわけでね、序だから、舞妓の踊りでも見せてと思ふんだが、お前、ひとつ、人選をしてくれんか。あゝ、何時もの処でよろしい。十人ばかり……。もう二十分ほどして出掛けるから、お前先へ行つてゝくれ。よし、わかつた。

Cの電話室では、少年がぼんやり受話器を耳に当てゝゐるが、しまひにそのまゝ居眠りをしはじめる。

主人らしい男がはひつて来て、少年を突きのけ、受話器

を耳に当てる。

主人　もし、もし、どなたさまでおまつしやろ？

男甲　え？　わしに相談……？　そいつは弱つたな。この次ぎちやいかんか。それやさうさ。無論、承知はしてゐるが、今度は勘弁してくれ。

主人　阿呆らし、あんた、だれや。えらい混線や。

男甲　さう、さう。ぢや、兎に角、わしが一と足先へ出掛けることにしよう。なに、かまはんよ。ぢや、さよなら……。

主人　さいなら……。おやすみ……。

男甲、受話器をかける。

Cの電話室でも、主人が荒々しく受話器をかけて去る。

男甲　では、かうしよう。わしが先へ行つて、後から迎ひを寄越すから、お前は、用意が出来たら、すぐ来るといゝ。お客さんだから、そんなにおめかしをして来なくつてもいゝよ。

女　あたし、そんなとこへ行かなくつてよ。

男甲　どうして……。

女　どうしてゞも……。

男甲　困るなあ、今更、そんなことを云ひ出しちや……。

女　困らないでせう。その方がいゝつて、ちやんとおつしやいよ。

男甲　もう約束しちまつたんだぜ。

女　だから、あなた一人で、行つてらつしやればいゝわ。

男甲　淋しくないかい。

女　淋しいわよ。

男甲　それ見ろ。

女　でも、いゝわ。淋しいぐらゐ我慢するわ。その代り、十二時までには帰つて頂戴ね。あたし、寝てるから、そうつと扉（ドア）を開けるのよ。さ、行つてらつしやい。

男甲　いやに聞き分けがいゝね。ぢや、ちよつと行つて来るよ。さうさう、お友達が来るかも知れないんだね。さうだと、却つて、わしがをらん方がよからう。

男甲、帽子を取つて出て行く。

男乙、書物を投げ出し、寝台にもぐり込む。スタンドの灯を細くする。

Cの電話室が暗くなる。

やがて、女は、隣室に駈け込み、外出の用意をして現れる。電話を掛けようとするが、やめて、そのまゝ、部屋の外に姿を消す。

Bの部屋の扉（ドア）をノツクする音。

男乙、起き上り、扉を開けに行く。

女が現れる。男乙は、無言のまゝ、女を抱かうとするが、女は、からだを退く。

女　多分、そんなことだらうと思つた。

男乙　ぢや、どうしてやつて来たの。

女　そんな訊き方、ないでせう。来たかつたから、来たのよ。
で、やつぱり、行くの。行かないの？
男乙　行くさ。
女　もう、行くの、およしなさい。
男乙　行かなけれや、どうなるんだい。
女　どうもならないわ。たゞ、あんたが、何処にゐたつて、あたしにやおんなじだつていふだけよ。
男乙　僕の方はさうは行かない。
女　あら、不思議ね。
男乙　現に、そばにゐればこそ、かうして君を引張り出すことになるぢやないか。
女　己惚れちや駄目よ。あんたの意志なんかもう問題ぢやないわ。
男乙　さういふことを云ひに来たの、わざわざ……。
女　ムキにならなくつたつていゝわ。おどかされたから怒つてるのよ。
男乙　さうか。まあ、どつちでもいゝや、来てくれさへしたら……。明り、このまゝにしとかうか。
女　明りのことなんか気にしないだつていゝわよ。
男乙　……。
女　まだ怒つてるのよ。もつと御機嫌を取らなくつちや駄目よ。
男乙　さうか、失敬、失敬……。
女　（笑ひ出し）どら、どんな拳銃だか、見せて御覧なさい。
男乙　何処へ置いたつけ……。あゝそこだ、テーブルの上だ。
女　（拳銃を取り上げ、男をねらひ）これが、あんな音を出すの。撃つてもいゝ？
男乙　危い。また、マネージャーが飛んで来ら。
女　（拳銃をテーブルの上に置き）あんた、うちの宿六さん、どう思つて？
男乙　なかなか肥つてゝ、立派ぢやないか。
女　それだけ？
男乙　いゝステツキを持つてるね。
女　それから？
男乙　毛深い質だね。胸なんか毛だらけだらう。
女　余計なこと云つてらあ。かういふ風ぢや、あんたと会つても駄目ね。しんみりした話なんか出来やしないわ。
男乙　君がわるいんだよ。初めから調子を外すんだもの。
女　あ、さうさう、いゝこと考へた。電話、借りるわよ。（受話器を外す）もし、もし、都ホテルへ、どうぞ……。
男乙　そんなことして、いゝの？
女　もし、もし、ホテルですか。二百五番の部屋へ繋いで下さい。えゝ、ゐる筈です。さうですか。あ、もし、もし、あなた？　あたしよ。あ、た、し……。まだ起きてらつしやるの？　えゝもうぢき帰るわ。え？　さういふわけぢやないけど、どうしてらつしやるかと思つて……。うゝん、やつぱり、心配なのよ……。うそばつかり……。淋しいのは、あたしよ。一人で車に乗るでせう、さうすると、つひ、うつかり、あなたがそばにいらつしやるつもりで、話しかけさうになるのよ。自分でも可笑しいくらゐよ。……えゝ……え？　帰つたら、いくらでも……。あら、いやだ、それはあたしの云ふことよ。ぢや、さよなら。また、あとでね。

（キツスの音をさせ、受話器をかける）

男乙　それだけの用事か。真面目でないな。

女　これで真面目なのよ。

男乙　結婚して、今日で、幾日目だつけ？

女　十七日目……。式を挙げて十七日目だけど、まだほんとに結婚はしてないのよ。

男乙　そんなこと訊いてやしない。

女　訊かれなくつたつて云ふのよ。相手が年寄りだと思ふ通りになるわ。

男乙　ふうん、そんなもんかね。

女　あたし、少しは変つたでせう……。

男乙　君もすつかり面倒臭い女になつたよ。早くどつちかにきめたらいゝぢやないか。帰るなら帰る。ゐるならゐる……。

女　おや、あんたこそ、いやに威猛高ね。そんなに云ふなら、ゐたげるわよ。その代り、一つ条件を出すわよ。あの人が此処へ迎へに来たら、文句を云はずに、あたしを連れて行かせるのよ。

男乙　大将が此処へ来るのかい？

女　今、来るやうにするのよ。

男乙　なんだつてそんなことをするんだい？

女　あの人が何処まで寛大だか、それを試してみるのよ。それから……。

男乙　それから、僕が何処までお人好しだか、それを知りたいんだらう。真つ平だよ、そんなことは……。いゝから、もう、帰つてくれよ。

女　帰らない。あんたが、さつき、電話口でしたことは、どんなことだか知つてゝ？　あたしの何処かに、まだ少し残つてゐた「人を信じる心」が、あれですつかり吹つ飛んでしまつたのよ。

この時、Ａの部屋の扉が明き、男甲が悄然とはひつて来る。部屋中を見廻し、隣室の中をのぞき、絶望的にソファにもたれかゝる。

女　あん時まで、あたしは、嘘を吐くのがいやだつたし、ほんたうのことが云へたら、どんなに楽だらうと思つてゐたのよ。それが、今では、嘘とほんたうの区別がつかなくなつたのよ。今迄、ほんたうだと思つてゐたことは、みんな嘘なんだわ。きつと……。あの人が、今、あそこへ行つてることだつて、嘘かも知れないわ。さうよ、見てらつしやい。（電話に向ふ）もし、もし、都ホテル……え、すみません。……あ、もし、もし、二百五番へ願ひます……。

Ａの部屋の電話が鳴る。男甲、受話器を耳にあてる。

女　もし、もし。

男甲　聞いてるよ。

女　帰つてらしつたのね。

男甲　あゝ、帰つて来た。お前、何処にゐるんだ。

女　当てゝ御覧なさい。

男甲　わかつてるよ。今晩は帰らないのかい。

女　帰りたくつても帰れないの。赦して下さる？

男甲　別段、悪いことでもないぢやないか。早く帰つておいで。

女　さうおつしやると、なほ帰れないわ。さつき、二人でゐる時ホテルへかゝつて来た電話ね、あれは、学校のお友達でも、その旦那さんでもないのよ。

男甲　知つてるよ、そんなことぐらゐ……。

女　さうでせう。あたし、今、その人のところへ来てるの。あなたに隠れてよ。でも、あたし、後悔してるの。取返しのつかないことをしたと思つてるの。

男甲　取返しはつくさ、なんでもないよ。

女　だから、あたし、あなたに済まないと思つて、決心したの。

男甲　ふうん、どんな決心……。

女　今、すぐわかるわ。（女はテーブルの上の拳銃を取り上げる）

男乙　（慌てゝ女の手を抑へ）よしてくれよ、それだけは……。弾丸（たま）がはひつてるんだぜ。

女　嘘よ、そんなこと……。（銃先を喉に当てる）

男乙　（もぎ取らうとして）空砲だつて、怪我をするよ。

女　（さう云はれて、今度は、急に銃先を男の方に向け、放す。）

爆音）

男乙は、そのまゝ、前にのめる。

女、驚いて、駈け寄る。

男甲　よし、よし、それでよし。早く帰つて来なさい。弾丸がはひつてるつもりだつたら空砲だつた。その云ひわけも、一緒に聴かう。お前の芝居は、見てゐて腹が立たないよ。これはよくよくのことだ……。

青空文庫情報

底本：「岸田國士全集5」岩波書店
　　1991（平成3）年1月9日発行
底本の親本：「浅間山」白水社
　　1932（昭和7）年4月20日発行
初出：「文芸春秋　第九年第十号」
　　1931（昭和6）年10月1日発行
入力：kompass
校正：門田裕志
2008年3月19日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

音の世界

岸田國士

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/